

# 中学校における特別活動の現状と課題

## －生徒会活動を中心として－

Actual Conditions and Problems of Extraclass Activities  
at Lower Secondary Education: Focused on the Student Council

林 尚 示\*      井 上 有 史\*\*  
HAYASHI Masami      INOUE Yuji

**要約：**特別活動においては評価の困難性が従来から指摘されてきた。しかし、特別活動も教育課程の一部であり重要な教育活動であるため、適切な評価が必要である。

本研究では、中学校生徒会活動の調査と分析を通して、特別活動における評価の現状と課題を明らかにすることを試みた。その結果、特別活動の評価においては、評価理念や評価規準と比較し、評価形態、評価方法が画一的であり、十分に意識されていない現状が検証され、今後の課題が明らかとなった。また、国立大学附属中学校においては、特別活動の研究が更に発展する余地のあることが明らかとなった。

今後、学校の教育課程編成において、教師や学校の自律性の更なる向上が望まれる。

**キーワード：**特別活動，生徒会活動，評価，公立中学校，国立大学附属中学校

## Ⅰ 研究の目的

現代の中学校が直面する学習者の人間形成に対して、望ましい集団活動を通して展開される特別活動の担うべき教育的役割はきわめて大きい。しかし、中学校教育の現状を見ると、完全学校週5日制の実施に伴って「学力低下」への関心が集まり、また、「総合的な学習の時間」の検討などが重視され、学校によっては、特別活動は十分に顧みられることなく形式化、形骸化した状況にあるといわれる。その傾向に拍車をかけているのは、従来から指摘されている「特別活動における評価の困難性」ではなからうか。そこで、本研究では、まず近年の特別活動評価論について理論的な枠組みを提示する。その上で、山梨県の中学校「生徒会活動」を事例として取り上げ、現状調査と分析を試みる。さらに、全国の国立大学附属中学校における特別活動の研究推進状況を検討する。本研究の目的は、特別活動の現状や課題を明らかにし、今後の方向性を明示することである。

---

\*教育実践総合センター    \*\*甲府市立北中学校（山梨大学内地留学生）

## II 研究の対象

研究対象校については、筆者が長期的に関わることが可能な山梨県内の中学校、及び大学や学部と共に教育研究を実施しているため、教育研究に先駆性の認められる全国の国立大学教育学部附属中学校（以下、学部名を省略する）とする。「生徒会活動」を中心として取り上げるのは、「生徒会活動」が組織の性格上学校の全生徒に関わる広がりを持ち、また、他領域や家庭、地域社会とも深く関連するなど多面的であるという理由による。そのため、「生徒会活動」は、義務教育最終段階にある中学校において、学習者一人ひとりの自発的、自治的精神の育成や、学校生活の充実改善を図る上で、主要な役割を担っていると考えられる。

## III 研究の方法

本研究は、中学校における特別活動の理論的研究の側面と、「生徒会活動」を中心とした実践的研究の側面とを有する。まず、近年の特別活動論を評価の視点から整理し再構築することを基礎とし、その上で、山梨県内の中学校を学校規模別に6校抽出し、「生徒会活動」の評価の現状を調査、分析する。さらに、全国の国立大学附属中学校についても特別活動やその中の「生徒会活動」の研究状況を検討する。

## IV 特別活動評価の枠組み

特別活動の評価については、少なくとも1970年代初頭から「生徒の人格全体の評価を志向する結果、実施には多くの困難が伴うことを避けられない」<sup>1)</sup>とされており、評価の困難性が指摘されていた。しかし、特別活動も教育課程の一領域であり、学校教育の一部であるため、学習者の人間形成を目的とした教育内容の決定や改善のためにも、評価は必要であろう。

ここでは、特別活動評価の枠組みとして、評価理念 (philosophy) の側面、評価形態 (mode) の側面、評価方法 (method) の側面、評価規準 (criterion) の側面の4側面を検討してみたい。

評価理念 (philosophy) の側面を重視した特別活動の評価には、特別活動によって構築される人間関係像、設定する教育目的、特別活動のもつ意義などのような、何のための評価であるかという側面に重点を置いた特別活動の評価が該当する。

評価形態 (mode) の側面を重視した特別活動の評価には、教師・学習者・管理者・研究者等の評価主体者、学習者・教師・教育的処遇・学習環境等の評価対象、量的データ・質的データといった取り扱うデータなどに重点を置いた特別活動の評価が該当する。

評価方法 (method) の側面を重視した特別活動の評価には、観察法、面接法、質問紙法、テスト法など、データ収集の方法に重点を置いた特別活動の評価が該当する。

評価規準 (criterion) の側面を重視した特別活動の評価には、絶対的規準、相対的規準、個人内規準などの具体的な評価規準や観点に重点を置いた特別活動の評価が該当する。この特別活動評価論の類型化の特徴は、評価論を抽象的なものから具体的なものまで4段

階で区分したことである。

抽象的レベルから具体的レベルに至る段階で、評価理念、評価形態、評価方法、評価基準の4層によるモデルが提示できる。特別活動の評価においても、何のために、誰が何を対象として、如何なる方法で、如何なる基準を設定して評価するのかを明確化しておくことは必要であろう。なお、評価理念と評価基準については、特別活動の計画段階のみでも十分に検討することが可能であるが、評価形態と評価方法については、特別活動の実践場面への適応を意識していないと充分には検討することが困難なものである。

## V 山梨県中学校「生徒会活動」の現状調査

### 1. 調査の枠組み

本調査は、IVで示した「特別活動評価の枠組み」に照らして、山梨県中学校「生徒会活動」における評価の実施状況を明らかにすることを目的とする。調査に際しては、実際の生徒会運営に大きな影響を及ぼすことが予想される「全校生徒数」に着目し、「学校規模」ごとに調査対象校を抽出した。学校規模の分類は、表1に示す通りである。

表1 学校規模の分類

学校規模		全校生徒数	学級数	教諭数	備 考（地域の特色等）
小規模校	A校	18	3	6	山間部，農業地域，首都圏からの山村留学生受け入れ校
	B校	93	3	8	山間部，農業地域
中規模校	C校	396	12	21	都市部，住宅地域，過疎地域
	D校	447	13	24	都市部，商業地域，過疎地域
大規模校	E校	583	16	35	都市部，住宅地域
	F校	639	18	36	都市部，新興住宅地域

(2002.5.1 現在)

今回の調査では、山梨県の実態により各学年の平均学級数が3学級未満を小規模校，3学級以上5学級未満を中規模校，5学級以上を大規模校とした。なお、学級数には設置が一律ではない特殊学級は含まない。全校生徒数，学級数，教諭数は各学校の「学校要覧」にもとづいている。

### 2. 調査の概要

今回の調査では、抽出した調査対象校を訪問し、生徒会活動担当教師への直接インタビュー及び資料収集を実施した。インタビューの内容は、①学習評価、②「学級活動」「学校行事」及び他領域との関連性、③家庭、地域との関連性、についてである。また、収集した資料は、①「生徒会運営方針」など、年度当初に職員会議等で提示された文書、②年度当初に実施された「生徒総会」議案書、③生徒会規約、④学校要覧である。

なお、今回の調査は、2002（平成14）年度5月下旬から6月上旬にかけて実施したも

のであり、2002（平成14）年度予定している「生徒会活動」を対象とする。

### 3. 検証結果（考察）

表2（稿末）に示すように、すべての事例において「生徒会活動」の指導目標が明示されている。ここでいう指導目標とは、年度当初の職員会議等で生徒会活動担当教師から他の教師に提示された文書に記載されたものを示す。「指導目標」の他、「目的」「運営方針」「実践目標」等、名称は事例によって様々であるが、「生徒会活動」に関する教師の理念が明記されたものをすべて含んでいる。これらは、評価の際には評価理念と見ることができる。全ての事例において、学習者の「自主性」や「実践力」の育成などを中心に、特色ある教育活動を展開していることが確認できた。

評価規準については、各事例によって様々な差異があり、多角的な視野で評価を行おうとする教師の姿勢がうかがわれた。特にC校では、「共感性」として3点、「社会的な資質」として1点を明記し、独自の評価規準を設定している。それらは、具体的には次の通りである。

#### 【共感性の育成】

- ・自己の心を開く勇気と信頼を基盤にし、自分の立場や相手意識、目的や場面を踏まえて自分自身を表現しようとする。
- ・人と人との違いを大切にし、積極的に相手の考えや気持ちを理解しようとする。
- ・人との交流を大切にし、他者との交流を通して新たな見方や考え方、感じ方を学ぼうとする。

#### 【社会的な資質の育成】

- ・全校的な視野に立って、学校生活の向上や他のためを考えて、自己の役割を果たしている。

D校では「学級活動」や「学校行事」との関連性が強調されており、「生徒会活動」の役割が特別活動全体の中で有機的に位置づけられていることに特色がある。E校では「教師サイドの協力体制」を評価規準に取り入れている。これは、単に学習者の活動を評価するだけでなく、教師の指導改善に生かすために重要な視点であると考えられる。

以上のように評価理念、評価規準については各中学校での創意工夫や特色を確認することができた。しかし、評価形態、評価方法については、ほとんどの事例において十分に検討されることなく旧来のやり方を依然として継続しており、結果として次のような現状と課題が指摘できる。

まず、評価形態については、教師が評価主体者となり「学習者の活動」を評価することが中心となっている。生徒会活動担当教師へのインタビューによれば、「評価の対象」は、活動の成果や集団の成長に視点を置いている場合が多く、個々の学習者の長所や成長の過程が十分に評価されているとはいえない現状がある。これは、「生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価する」<sup>2</sup> という視点の未定着を示すものである。唯一D校では「生徒の前向きな態度」を個性と捉え、評価対象としているところが特色といえる。

次に、評価方法については、「教師による観察」が中心である。対象校の多くは評価規準に沿って「学習者の活動」を教師が観察し、評価するという方法である。しかし、生徒会活動担当教師へのインタビューでは、実際に生徒を指導しながら、観察・評価することは非常に困難であることが指摘された。特に、個々の学習者についての評価資料作成は

「不可能である」との声も聞くに至った。これは、教師の「指導」と「観察による評価」の並行実施には限界があることを示すものである。

また、評価資料作成の現状から次のような課題が浮き彫りにされた。一般的には、「生徒会活動」における総括的な評価は、学級担任を通して通知表や指導要録等に記載される。したがって、学級担任が適切な評価をするためには、多様な視点から作成された評価資料が必要となる。しかし、今回の調査では、有効な評価資料を作成している事例を確認することはできなかった。さらに、委員会活動の指導では、学級担任ではない各委員会の担当教師が学習者を観察・評価するが、その評価内容を学級担任にフィードバックするための手段が明確になっている事例は、残念ながら皆無であった。教師に対する生徒数の割合が低い小規模校では、個々の学習者の活動を学級担任が直接観察し評価することも、ある程度は可能である。しかし、学校規模が大きくなるにつれて、学級担任が直接観察し評価することは不可能となる。この点への対応策として、大規模校であるF校では、「質問紙による自己評価」を導入している。しかし、内容を見ると活動自体の見直しのために実施されている面が強く、学級担任が個々の学習者を評価する際の有効な評価資料とはなり得ていない。現状では、学級担任の行う「生徒会活動」の評価は、学習者の諸活動のうちごく限られた面にとどまっているといえる。もちろん、学級担任による評価が全てというわけではないが、学級担任の学習者に対する影響力を考えれば、問題は深刻である。

以上、山梨県中学校「生徒会活動」の評価の現状について分析した。今回の調査では、「他領域との関連性」、「家庭、地域との関連性」についても検討し、その結果、「生徒会活動」と「総合的な学習の時間」、「各教科」との関連や、小規模校を中心とした家庭、地域社会と連携した実践など、いくつかの興味深い特質を明らかにできた。しかし、ここでは、「特別活動の評価」を中心に論じたためこれらについては割愛する。

## VI 全国国立大学附属中学校での特別活動研究状況

これまでに、特別活動の評価について理論的な枠組みを提示し、公立中学校の「生徒会活動」に着目して検討を進めてきた。ここからは、全国レベルで特別活動の状況を分析する。

まず、全国の国立大学附属中学校の研究紀要、実践報告書等を参照して2001（平成13）年度の特別活動に関する実践や研究の掲載状況を検討した<sup>3</sup>。全国の附属中学校（含、附属中等学校）中43校の研究紀要や実践報告書等を収集できたが、その結果、必ずしも国立大学附属中学校で特別活動の研究結果が研究紀要や実践報告書等に掲載されているわけではないことが明確化した。しかし、複数の国立大学附属中学校で特別活動研究が研究紀要や実践報告書等に掲載されており、国立大学附属中学校によっては積極的に特別活動の研究が推進されていることもまた事実である。

具体的な実践例が掲載されている場合以外に、活動内容の項目や全体的な留意点などが掲載されている場合も含めて抽出してみると、特別活動の内容別では、「学級活動」が最も多く、6校での事例があり、続いて「学校行事」は5校、「生徒会活動」は3校のみであった。今回収集した資料の中で「学級活動」、「生徒会活動」、「学校行事」の3領域全ての活動内容が研究紀要等に掲載されていた国立大学附属中学校は、X大学附属中学校とZ

大学附属中学校の2校のみである。また、「生徒会活動」の活動内容が研究紀要等に掲載されていたのは、前述の2校に加えてY大学附属中学校の合計3校である。よって、「生徒会活動」を中心として特別活動の具体的な評価枠組みを検討するために、X大学附属中学校、Y大学附属中学校、Z大学附属中学校を抽出して分析検討する。

X大学附属中学校では、特別活動の理念は明記されており、1年で「生活訓練の重視」、2年で「意味追求の重視・生活の変革」、3年で「文化の創造」である。これは、評価の際には評価理念と見ることができる。しかし、「生徒会活動」については、活動内容のみの記述となっている。具体的には、対面式、生徒会オリエンテーション、クラブ見学、応援歌練習、生徒総会、役員選挙、生徒会役員引継ぎ、球技大会の計画と練習、文化祭に向けた取り組み、生徒総会、予餞会（送別会、farewell party、執筆者註）が「生徒会活動」として実施されている<sup>4</sup>。しかし、収集できた資料からは、評価形態、評価方法、評価規準については明らかとはならなかった。X大学附属中学校の特別活動評価の特色として、特に評価理念について明確化している点を指摘できる。

Y大学附属中学校では、「生徒会活動」の目標や主な活動が『研究収録』に掲載されている<sup>5</sup>。評価理念としては、「生徒みずからの手で明るく楽しい学校生活を築きあげ、その活動を通して自主的・自覚的規律を確立する」という「生徒会活動」の目標を指摘できる。評価形態としては、学習者を対象とした評価と教師を対象とした評価の両方が指摘できる。学習者を対象とした評価規準については、「生徒会活動を進めていく上で大切にしていること」として4点掲載されている。その内容から判断すると、評価規準は次の通りである<sup>6</sup>。

- ・自主性・積極性・継続性……………（前略）自主的・積極的な活動を継続的に展開する。
- ・組織内の連携、学級活動との連携…（前略）中央委員会が、執行部として生徒会活動の要となって、学級活動や各部との連携を図る。
- ・主体性……………各専門部は（中略）中央委員会との連携のもとで主体的に活動する。
- ・学級活動との連携……………学級活動が生徒会活動の基礎であり、生徒一人ひとりの願いや要求を各専門部や中央委員会の方針や活動に反映させる（後略）。

教師の教育行為についての評価規準には、熱意、学級との関係性、活動の意味や価値の理解、リーダーの育成、活動時間と場所の確保が挙げられる。Y大学附属中学校の「生徒会活動」の評価の特色として、評価理念、評価形態、評価規準については明確である。しかし、評価方法については具体的な言及がないようである。

Z大学附属中学校の「生徒会活動」には「自主的、実践的な集団活動を通して、学級や学年・学校全体における自分の役割を果たしながら、他者との連帯感を深め、人格の調和的な発達を図るとともに、自分のよさを生かすことのできる能力を育成する」<sup>7</sup>という特別活動の目標にもとづく評価理念がある。評価形態、評価方法については必ずしも明確に記述されてはいない。評価規準については、次の5点を挙げることができる<sup>8</sup>。

- ・主体性……………生徒が主体となって生徒会を運営していること。
- ・満足感・成就感…（前略）生徒一人一人に各活動を通じて満足感や成就感を味わわ

せること。

- ・参加意識……………生徒に参加しているという意識を持たせ、みんなで創る生徒会にしていくこと。
- ・活動実感……………一人一役など日常の活動の大切さを実感させること。
- ・自治……………学校を支え、創造していくのは自分たちであるという意識を育てること。

Ⅱ 大学附属中学校の特色として、評価理念、評価規準については明確化しているが、評価形態、評価方法については必ずしも明確化していないようである。

以上 3 事例をまとめると、表 3（稿末）の通りである。表 3 からは、評価理念、評価規準については判断できるが、評価主体者、評価対象、データの特色などに関わる評価形態の側面や、評価のためのデータ収集に重点をおいた評価方法の側面にはさほど留意されていないようである。

## VII 結論

本研究では、特別活動評価の理論的枠組みと、中学校の具体的事例から現在の特別活動における評価に関する検討を進め、特に「生徒会活動」を分析検討してきた。その結果、「生徒会活動」を中心とした特別活動の評価について幾つかの興味深い特質が浮上してきた。それら本研究の成果は、次の 3 点に集約することができる。

第 1 番目に、山梨県中学校「生徒会活動」についてであるが、評価理念と評価規準は多様な形で各中学校の教育実践に浸透し、特色ある活動が展開されていることが確認された。しかし、評価形態については画一的であり、特に、「生徒のよい点や進歩の状況」を積極的に評価する視点や、教師以外の評価主体者を模索する視点が不足していることが指摘できる。また、評価方法についても、有効な評価資料の作成方法や学級担任へのフィードバック手段の確立など、今後の教育実践の中で検討すべき課題が明らかとなった。

第 2 番目に、国立大学附属中学校の「生徒会活動」の内容を検討した結果、評価理念と評価規準については抽出可能であるが、評価形態と評価方法については必ずしも十分に意識して「生徒会活動」を記録あるいは計画しているとはいえないようである。ここからは、現在の「生徒会活動」で誰が何を評価するのか、そして、観察法、面接法、質問紙法、テスト法など如何なるデータ収集法を使用するのかといった評価の手続きについては課題として指摘できる。よって、今後は、評価理念や評価規準を十分に活かし、「生徒会活動」の形式化・形骸化を防ぐために、評価形態や評価方法の検討をより積極的に推進していくことが提案できる。

第 3 番目に、国立大学附属中学校の研究紀要、実践報告書等を検討した結果、特別活動の研究成果の掲載状況が振るわないことを指摘できる。具体的には、「学級活動」が 43 校中 6 件、「学校行事」が 43 校中 5 件、そして「生徒会活動」はわずかに 43 校中 3 件のみの掲載状況である。これは、特別活動が研究対象としては重視されていないことを示している。しかし、本来、教育課程は教科の活動と教科外の活動により構成されるため、教科外活動の中の特別活動も、教育目的達成のために研究対象として積極的に取り扱われる必要があるのではないだろうか。

現在の学校の教育課程編成は、「研究—開発—普及」モデルに傾斜していたこれまでのトップダウン型から、「実践—評価—開発」モデルによる特色ある学校づくりへと移行しつつある。このような状況の中で、集団や社会の一員としての資質・能力の育成を通じた人間形成のために、特別活動においても積極的な教育実践を展開し、学習者の状況や教師の教育行為などを適切に評価し、より適した活動内容の開発を志向することが必要であろう。そのためにも、教師や学校の自律性の更なる向上が望まれる。



表2 山梨県中学校生徒会活動の評価の現状

学校名	評価理念 (philosophy)	評価形態 (mode)	評価方法 (method)	評価規準 (criterion)
A校	民主的、自主的な自治活動を行い、それを通して民主的社會人として活動していく力を身につけていくことを目的とする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価主体は教師</li> <li>・学習者を対象とした評価</li> </ul>	教師による観察法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・深く考え意欲的に学習する</li> <li>・健康でたくましく情操豊になる</li> <li>・他を思いやり共働できる</li> <li>・礼儀をわきまえ規律ある行動をとる</li> <li>・ものを大切にできる</li> </ul>
B校	本会は本校生徒の自治的精神に基づき、先生の指導や助言を得て自主的共同生活の充実をはかり、会員の親睦融和と文化的、体育的(身体的)水準を向上させ、なお全生徒の総意を実現することをもって目的とする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価主体は教師</li> <li>・学習者を対象とした評価</li> </ul>	教師による観察法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主体的、自治的活動</li> <li>・組織内部の連携</li> </ul>
C校	教師の助言と指導とにより、会員が学校生活の実践活動を通して民主的な人格を養い、よい校風をつくる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価主体は教師</li> <li>・学習者を対象とした評価</li> </ul>	教師による観察法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・共感性</li> <li>・社会的な資質</li> </ul>
D校	生徒が主体となって決めたテーマ・活動方針に沿って、生徒自らが企画・運営していく場面をできるだけ数多く設定し、多くの生徒が目的を持って活動できる取り組みを仕組んでいく。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価主体は教師</li> <li>・学習者の個性を対象とした評価</li> </ul>	教師による観察法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集団としての豊かな表現力</li> <li>・クラスの団結力</li> <li>・集団としての意思決定力</li> <li>・生活力</li> </ul>
E校	自分たちで気づき、考え、行動することができるよう生徒会づくり。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価主体は教師</li> <li>・学習者を対象とした評価</li> </ul>	教師による観察法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主体的、自治的活動</li> <li>・自発的実践力</li> <li>・教師サイドの協力体制</li> </ul>
F校	本会は、会員の自発的活動を通じて学校生活の改善や福祉を図り、校風を高め民主的な社會人に成長するように努めることを目的とする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価主体は教師及び学習者</li> <li>・学習者を対象とした評価</li> </ul>	教師による観察法・自己評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常生活の充実</li> <li>・行事の充実</li> <li>・表現活動の充実</li> </ul>

表 3 各附属中学校生徒会活動の評価の特色

学校名	評価理念 (philosophy)	評価形態 (mode)	評価方法 (method)	評価規準 (criterion)
X大学附属中学校	1年で「生活訓練の重視」、2年で「意味追求の重視・生活の変革」、3年で「文化の創造」。	—	—	—
Y大学附属中学校	生徒みずからの手で明るく楽しい学校生活を築きあげ、その活動を通して自主的・自覚的規律を確立する。	学習者を対象とした評価と教師の教育行為を対象とした評価。	—	(学習者対象) 自主性・積極性・継続性、組織内の連携、学級活動との連携、主体性。(教育行為対象) 熱意、学級との関係性、活動の意味や価値の理解、リーダーの育成、活動時間と場所の確保。
Z大学附属中学校	自主的、実践的な集団活動を通して、学級や学年・学校全体における自分の役割を果たしながら、他者との連帯感を深め、人格の調和的な発達を図るとともに、自分のよさを生かすことのできる能力を育成する。	—	—	主体性、満足感・成就感、参加意識、活動実感、自治。

## VIII 註

- 1) 井上治郎「特別活動の管理」、飯田芳郎、大浦猛、澤田慶輔、宮田丈夫編『中学校特別活動事典』、第一法規、1971年、p.53。
- 2) 文部省『中学校学習指導要領(平成10年12月)解説—特別活動編—』、ぎょうせい、1999年、p.120。「中学校学習指導要領」第1章総則、第6-2-(11)より。
- 3) 結果的に資料収集できた国立大学附属中学校は43校である。国立大学附属中学校は大学に附属する中学校と学部附属する中学校があるが、本稿では便宜上、全て○大学附属中学校という形態で表記する。なお、資料収集できた国立大学附属中学校の発行する全ての発行物を検討するには至っていないが、研究紀要、実践報告書等の1種類以上を検討した。
- 4) X大学附属中学校編集発行『新しい学びの創造—一次代の可能性を拓く総合的な学びの創造—』、2001年、pp.135-144。
- 5) Y大学附属中学校編集発行『研究収録』第31集、2001年、pp.78-79。
- 6) 同上、p.78。
- 7) Z大学附属中学校編集発行『他とともによりよく生きる生徒を育成する教育課程の編成—3年次—緒論・道徳・特別活動編』2001年、p.27。特別活動の目標から評価理念を推定した。
- 8) 同上、p.31

なお、執筆分担については、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴを井上が担当し、Ⅳ、Ⅵ、Ⅶを林が担当した。